

# レーモン・クノーの『青い花』における歴史 ＝物語の終焉あるいは金、銀、鉄の形象（その2）

— 1614年の物語（前半） —

尾形 弘人

## はじめに：オージュの賭け、あるいは1439年から1614年への移行

『ひとつの規範的な歴史』（以下『規範』）を絶対的な参照先として始めた我々の拘束的な読みは<sup>1)</sup>、『青い花』の1264年および1439年の物語に、起源の労働なき豊穰と飽食、人口の増加に伴う不可避的な食の危機、その果ての黄金時代の終焉を順次読み取り、黄金時代から銀の時代へ、銀の時代から鉄の時代へと至るシナリオの最初の部分を確認した。本論はこれに続く1614年の物語を銀の時代の寓話と仮定し読み進めるものであるが、まずは1439年の物語の最後に仕掛けられたオージュの賭けに注目したい。言うまでもなく、賭けの目的は《お金＝銀 argent》を得ることにあり、黄金時代も破局を迎えたオージュがこれを為すことは、銀の時代と呼ばれる新たな時代へと移行するための伏線と思われるからである。

— 夜明けとパパの帰りを待ちながら、何かして遊びませんか？

— <sup>ケル・ジュ</sup>どんな遊びだ？

— <sup>アン・ジュ</sup>賭け事など。

— <sup>ケル・アン</sup>賭けるものは何だ？

— パパの命よ。

— 何と良い考えじゃ、と陽気さを取り戻した公爵が叫んだ。

こうして、彼らは夜明けまで賭けをした。(F.B., p.110)

この賭けはオーギュに絶対的な空腹を経験させたリュスユールが持ち掛けたもので、黄金時代を喪失したオーギュがこれに乗らない手はない。何しろ自分を絶望の淵へと追いやった敵自身が、逆転の機会を与えてくれているのである。是が非でも食の危機の元凶たる小娘を打ち負かして、自らの意に従わせなければならない。175年に渡る長き夜を通して為されるこの賭けの顛末はいかに。また、ふたたび朝を迎えたとき、オーギュはリュスユールを妃として城に迎えることになるが、その意味するところは何か。1614年の物語においてまず読み取るべきはこれである。

また、これほど明示的ではないが、テキストはシドロランの物語にもひとつの賭けを仕掛けている。もう一度、『瀕死のヘラクレス』の絵（品評会で金賞を得たこの絵画は、前半最後の金の形象で、瀕死の黄金時代を象徴するものであった）の複製が飾られたあの居酒屋に立ち戻り、三度反復されている《三連勝式馬券 tiercé<sup>2)</sup>》に注目しよう。居酒屋で盃を片手に一攫千金の夢を語ることは、何の変哲もない平凡な風景にも思われるが、オーギュの次の言葉と重ね合わせてみれば、その「ミステリアスな問題」(F.B., p.96)の射程が浮かび上がってこよう。

[……] これらの間抜けの間でも最も間抜けの中から三人の若い馬鹿者に手をつけておいた、こいつらに我が三連式 tiercé をつかませるためにな。[……] ひとつ善き事が為された。(F.B., p.88)

つまり、シャルル7世に対する謀反の際に知り合った三人の若者に、悩みの種だった三つ子の娘たちを押し付けようというのである。これがシドロランの物語の反復であることは、彼がやはり《三つ子の娘 triplée(s)<sup>3)</sup>》を子に持つこと、売れ残っていた最後の一人がやっと片付いたこと、彼もまた「ひとつ善き事が為された」(F.B., p.80)と娘の結婚を祝福していることから明らかであろう。だが、両者の間には根本的な違いがある。シドロランは娘夫婦を三組とも平底舟から追い出したが、オーギュは三人の間抜けを娘婿

として城に招き入れるつもりなのである。しかし、彼の城はといえば、台所は火の車、結婚の宴などとても無理な状態にあった。とすれば、三連勝式馬券=三つ子の結婚は、残り少ない元金を託すだけの価値のある賭けなのであろうか。

### III-1. 1614 年前半 (その1) : 舞台装置としての銀の形象

かくして第三の物語は、オージュに見込まれて城へとやって来た《三連勝式》の婚約者たちの会話で唐突に始まる<sup>4)</sup>。

— それはやがて分かるさ、スィリー殿が二人の義理の兄弟、トルヴ伯とマルブラケ司教代理に言った。

— どうでもいい! とトルヴ伯。彼が再婚するだって、別に構わないさ。しかし、彼が我々に申し出る埋め合わせのことを考えよう。

— 申し出てくれればだが、とスィリー殿。

— ちゃんと確かめる必要があろう、とマルブラケが口ひげを撫でつけながら言った。(F.B., p.117)

彼らは何よりも気にかけている《埋め合わせ dédommagements》とは、オージュの娘たちと結婚する代償のことで、先にキュヴトンがシドロランに求めた「昔で言うところの持参金」(F.B., p.81) と別のものではない。とするならば、我々はこの三人の若者に対しても、《お金のことしか頭にない男=銀の時代の人間 homme d'argent》なのか、と問わねばならないだろう。彼らの守銭奴ぶりについては、例えば「婿たちは待ちきれなくて地団駄を踏む、このままでは怒りでいずれ小便を漏らすだろう」(F.B., p.120) といった一連の記述に雄弁で、マルブラケなどは「顔に駆られて不安をしかめる<sup>5)</sup>」(F.B., p.119) ほどである。だが、こういったことは事の表面でしかない。真に注目すべきは、これらの守銭奴が登場してくるこの場面の舞台装置である。

ちょっとした腹拵えのために、ムスカイヨは彼らを食堂へと案内した。スイリー殿が鑑定人然とした様子で調度類を観察する。

—なんと、なんと、と彼は呟く、純粋なルイ13世様式ですな。(F.B., pp.117-118)

時代の移行を示すため、1614年の物語の冒頭が時の国王(1610年即位)に言及することは極めて自然である。しかし、ルイ13世が後世に残したものを考えれば、これは時代の画定に留まらず、深い意味の連鎖において象徴的な価値を有している。一般名詞としての《ルイ louis》は、元々はルイ13世の治世に鑄造された金貨の名称に他ならず、これもまた黄金のテーマ系に連なっているのである。とするならば、先の時代に見た黄金時代の終焉は、我々の誤読ということになるのだろうか。さらに都合の悪いことに、《純粋なルイ13世様式=純粋な金貨》は、かつてオージュの城に満ち溢れていた《精製された純粋で混ぜ物のない金でできたツール製金貨》を想起させる。しかも、ムスカイヨがスイリーの感嘆に答えて「公爵におかれては、時代の流れに遅れまいと努めておられる」(F.B., p.118)と語るに至っては、我々の誤読は決定的にも思われる。

しかしながら、オージュが新たに設えたものはこれだけではない。調度品を褒め称えたすぐ後で、同じ人物がそこにあったヴェネチア・グラスについてこう述べるのである。

—銀の大盤振舞だ L'argent coule à flots, とスイリー殿はつぶやき、指を使っている司教代理に向かって付け加える、さあ、このフォークを使いたまえ。

実際、そこにはフォークがあった、しかも、これまた銀製。(F.B., p.118)

テキスト全体で11度登場する《argent》のうち、《銀》の意味で用いられ

ているのはここしかない。我々を誤読から救ってくれるのは、《ルイ金貨》の暗示性に大いに勝るこの銀の輝きである。振り返れば、1264年の「憔悴した風変わりな者ども」(F.B., p.13) や、1439年の「苔が蝕む、荒れ果てた墓」(F.B., p.66) のように、テキストにおいて時代の移行を表わすものは、各時代の冒頭に置かれた過去の遺物であった。つまり、《ルイ13世様式=金貨》は黄金時代の墓標のようなもので、その多くは語らぬ現前こそが銀の時代の到来を逆説的に告げているのである。実際、上に続けて別の人物が「時代とともに歩まねばなるまい」(F.B., p.118) と語っているが、この一言は礼儀作法という文脈上の意味を越えて、第三の物語の舞台が《銀の多量に出回っている L'argent coule à flots》ような時代であることを、強く予想させずにはおかない。のみならず、グラスとフォークという《食器》の形象を得てオージュの《食堂》に置かれた銀は、これから読み取るべき問題の在り処を仄めかしてもいる。すなわち、これまで黄金時代の飽食を楽しんできたオージュは、今後、いかなる食を口にするようになるのか、これを見届けることである。

### III-2. 1614年前半(その2): 銀の時代をもたらしたものの、あるいは賭けの顛末

舞台装置は整った。だが、銀の時代への移行とは、いかなる事態なのであろうか。『規範』には「何らかのやり方で、食物の量が(相変わらず労働なしに)ふたたび十分なものとなった時、人は(相対的な)第二の黄金時代を得る」(H.M., p.32) とある。問うべきは次の二点であろう。第一に、オージュはいかなる《やり方》で銀の輝きを得たこの舞台にまで到達したのか、そしてそれは銀の時代の解決法に適うものなのか。第二には、銀の時代が《相対的》ないし《擬似的<sup>9)</sup>》と形容されるのは何故か、また、オージュの第三の物語は、この相対性ないし擬似性の正確な寓意となっているのか。

まずは第一の点から検討しよう。この問いを言い換えるならば、先に確認しておいたオージュの賭けによって、一旦は危機に陥った城の財政が《(相

変わらず労働なしに) ふたたび十分なもの》となったか、ということである。新たに顎鬚をたくわえて登場してきたオージュは<sup>7)</sup>、将来の娘婿たちに声高にこう宣言している。

— さあ、今度はわたしを見るのじゃ、と公爵が付け加える。お前たちの前にいるのは、結婚のために君主より三十万リーヴルを賜った男である。(F.B., p.119)

結婚の祝いによって富を増すこと、ここに労働はない。とするならば、こうして望みどおりのものを手に入れたオージュは、夜通し為された例の賭けに勝利したのであろうか。命を賭けられていた父親が後に姿を見せることから<sup>8)</sup>、どうやらそうではないらしい。だが、もし彼が勝っていたとすれば、リュスユールは父親を吊し首にした男と結婚したであらうか。結婚なくしては祝い金もない。木こりの命など実はどうでもよく、真に賭けられていたものは労働なき豊穰の回復であり、オージュは小娘との遊び<sup>9)</sup>には負けておいて、人生における賭けに勝利したのである。しかも、彼が手にしたリーヴルとは《1リーヴル分の重さの銀 une livre d'argent》を基準とする貨幣単位に他ならず、この身分違いの結婚は、他の何ものでもなくまさしく銀を、来るべき時代を象徴するこの金属を、しかも《労働なしに》、オージュの城にもたらしたのである。

だが、このような《やり方》は歴史の寓意として認められるのであろうか。というのも、『規範』の示す銀の時代の解決法が《移住》を軸としているのに対し<sup>9)</sup>、ここでオージュはノルマンディーの城を離れることなしに、銀の時代を実現しているからである<sup>10)</sup>。これはむしろ奇跡的な豊作による食糧危機の解消のようなもので、オージュのやり方は僥倖に賭けることでしかないように思われる。だが、ひとたび僥倖にありつくことさえできれば、この賭けもまた銀の時代に移行するための方策として、事後的に是認されよう。というよりむしろ、こうして実現された銀の時代は、場の移動を伴わ

い分だけ、『規範』が提示する《最適な状態に最も近い解決法の採用の原理<sup>11)</sup>》に、より一層忠実であるとさえ言えるのではなからうか。ある意味で、結婚の祝い=リーヴル銀貨を見越して為されたオージュの結婚は、本来は天任せの僥倖を一種の必然と化するようなもので、彼が果した一発逆転は巧妙な計算の上に成り立っていたのである。物語的な潤色と言えればそれまでだが、いずれにせよ彼は《相変わらず労働なしに》ふたたび豊かになった銀の城へと戻ってきた。

他方、例の三人組の間抜けに賭けた《三連勝式馬券》はどうであろうか。散々焦らしておいて、オージュは遂に《埋め合わせ》について語り始める。

皆が各自の場所についたので、オージュ公は、婿たちのために、そして結果として娘たちのために、聖メヌホルド条約によって先ごろ獲得しておいた統治区、利権、特権の数々をすべて並べ挙げた。(F.B., p.121)

やはり策士オージュである。彼は三人を婿に迎えるに当って、《お金のことしか頭にない男》の欲望を満たしてやるだけのものを用意しておいたのである。だが、このような意味で《銀の人間》であることだけが、彼らの存在理由ではない。巧妙にシドロランの物語に移し変えられてはいるが、三人が城に迎え入れられた真の理由は、彼らが《間抜け》だという事実そのものにある。文脈は省略するが（註15参照）、シドロランは《浮かれ騒ぐ faire la noce》という表現の両義性について、「スモールa、たらふく飲み食いする se taper la cloche、スモールb、結婚を祝う [……]」(F.B., p.113) と述べている。つまり、三人の婿が《これらの間抜けの間でも最も間抜け les plus cloches d'entre ces cloches》の中から選ばれたのは、クノー流に言うならば、《たらふくの間でも最もたらふく》飲み食いするために他ならない。言い換えるならば、一旦は失われた飽食を回復するためにこそ、オージュは敢えて彼ら三人の間抜けを選んだのである。さらに言葉を遊べば、間抜け三人組はオージュの鐘楼 clocher に新たに据えるべき三つの鐘 cloche である

とも言えよう。つまり、ノルマンディーを離れようとしないうオージュはまさしく《地方根性 esprit de clocher》を体現しており、あくまでも城の中に留まって、新たな響きにより銀の時代の到来を告げる三つの鐘を合図に、ふたたび労働なき飽食を楽しもうとしているのである。

### III-3. 1614 年前半（その3）：銀の時代における食

舞台装置としての銀の食器、リュスユールとの結婚によって得たリーヴル銀貨、たらふく食うために選ばれた守銭奴＝銀の男たち、これら1614年の冒頭を飾る一切のものは、こぞって銀の時代を指し示しているように思われる。しかし、以上は事の半面でしかない。オージュはオージュのやり方で第二の黄金時代を得たとしても、それが《相対的》ないし《擬似的》であることが、いまだ示されていないのである。これを確認することなくしては、1614年の物語を銀の時代の寓意として断定するわけにはいかないだろう。注目すべきは、颯爽と登場してきたオージュの食の様子である。

公爵は喜んで笑う。揉み手をする。ついでにパテを素早くつかみ、フォークを用いることなく、それを貪り食う。

[……]

公爵はパテを貪り食いながら笑い続ける。危険なことだ、食べながら笑うことは。実際、彼は危うく窒息しそうになる。(F.B., p.119)

《貪り食う dévorer》こと、これは黄金時代の幸福な食を象徴する記号であった。銀の時代もまた労働なき飽食を許すのであるから、ここでオージュが貪り食うことは驚くには当たらない<sup>12)</sup>。しかし、彼はもはや「純粋に貪り食う者 purement dévorant」(H.M., p.38)ではあり得ない。『規範』には「黄金時代との本質的な違いは、経験がカサンドラの登場を可能にすることにある」(H.M., p.47)とある。『イリアス』のカサンドラはアポロンにより予言の能力を与えられたが、ひとたび食の危機を知ってしまった以上、銀の

時代の人間もまた将来の危機を予見せざるを得ず、「[黄金時代の] 幸福の第一義的要素、すなわち気安さ *insouciance* はもはや存在しない [……]」(*H.M.*, p.32) のである。

とするならば、貪り食いながら笑うことの危険性とは何か。『規範』は黄金時代の原光景を「人々は大いに食し、大いに笑ったものだった」(*H.M.*, p.29) と語っている。つまり、起源の気安さにおいては、《貪り食う》ことと《笑うこと》は等価的な関係にあった。これを引き裂いたものが危機の予見であり、カサンドラと同様、不幸にも授かってしまったこの能力こそが、絶対的な気安さの表現である笑いを奪い去ったのである。だが、彼女の真の不幸は、アポロンを拒んだ罰として、誰も彼女の言葉を信じなくなった点にある。これはそのまま銀の時代の運命でもある。というのも、いま、ここにあるものは労働なき豊穡に他ならず、今日も満たされる胃袋にふと笑いがこぼれ、一瞬なりとも予見を忘れることは大いにあり得ることで、日々の飽食の果てにカサンドラの予言をすっかり忘却してしまう者も現れることであろう。笑いながら貪り食うことの危険性はここにある。笑いながら食した黄金時代は、予見を欠くが故に自ずと滅びた。危機を予見しつつ貪り食う銀の時代は、笑いを失った。それでも笑いながら食すとなれば、それは予見の忘却であり、破滅への道である<sup>13)</sup>。オージュの窒息騒ぎが警告するものはこれで、その喜劇性は銀の時代の悲劇性を逆に照らし出していると言えよう。

さらに寓意は続く。いかに移住を繰り返そうとも、やがて地上はどこも人間に満ち溢れ、逃げ場のない絶対的な食糧危機が彼らを見舞うことになる。銀の時代の解法が「単に先延ばしにするだけのもの *purement dilatoires*」(*H.M.*, p.49) とされるのはそのため、移住によって食の危機を場当たりに回避しながら、結果として最終的な破局への道を突き進むという逆説こそが、この時代の運命に他ならない。とするならば、オージュが「ウイキョウの酒精を浪費しすぎることのないよう、香料入り甘口ワインと蜂蜜水を注ぐように命じる」(*F.B.*, p.120) ことも、一連の寓意との関連において理解されるべきであろう。オージュを窒息死の危機から救ったこの飲み物は、後

に「不老長寿の妙薬 élixir de longue vie」(F.B., p.233)を探し求める錬金術の副産物であることが明かされているように、いわば銀の時代の延命薬のようなものと言える。これが尽きることは銀の時代の終焉を意味し、これを避けるために、というよりも破局を出来る限り《先延ばし》にするために、オージュは節約を命ずるのである。

こうして寓意は完成をみた。残る問題は、あたかも舞台の一切が整うのを待っていたかの如く、最後に登場してくるリュスユールの存在意義である。そもそも何故に彼女なのか。結婚の祝いを得るためならば、なにも木こりの娘である必要はない。確かにオージュは彼女の「非の打ち所のない美しさ」(F.B., p.106)に息を呑んだが、しかし外見に惑わされてはならない。リュスユールこそが黄金時代に終止符を打った食の危機の元凶に他ならない。だが、我々の読みからすれば、彼女がオージュの妃となるべき理由は、この否定的な価値以外にはない。つまり、この身分違いの結婚は、オージュの城から《気安さ》を奪い去るもので、銀の時代へと移行するために必要不可欠な通過儀礼となっているのである。実際、間抜けな婿たちと《貪り食う》オージュの傍らで、彼らの《笑い》を見守るリュスユールという構図こそ、常に破局と隣り合わせの銀の時代に最も相応しい絵画ではなかろうか。それだけではない。彼女の存在は危険ではあるが、しかしこの危険性こそが《予見》の維持を可能とし、オージュに《ウイキョウの酒精=不老長寿の妙薬》を節約させたとも言える。さらにまた、彼女がオージュと出会った場面(1439年, F.B., p.107)でフランス革命歌 *carmagnole* を歌い踊ることも、時代錯誤的な笑いを遙かに超えて、リュスユールの存在の何たるかを示している。というのも、大革命(1789年)こそが、後の第四の物語において、オージュを彼の城から、ノルマンディーの領地から、祖国フランスから《外》に追いやる決定的な出来事で、彼女は期せずしてオージュを襲う最大の危機を予告していたのである。黄金時代を終わらせ<sup>14)</sup>、銀の時代を見守り、その最終的な破局を《予見》する女性、リュスユールとはオージュにとってのカサンドラに他ならない。

### III-4. 1614 年前半（その4）：《ディコルニル》あるいは偽名の策術

さて、オージュが銀の時代へと移行を遂げている最中、もう一人の主人公は何をしていたのだろうか。美味しい食事をしようとしていたのである。日々の満たされない食事に《またしても失敗だ》が口癖となっているシドロランであってみれば、「一度でいいから、成功した食事を pour une fois un repas réussi」(F.B., p.111) と願うのも無理からぬことであろう。こうして、とりわけ評判の高いレストランに出向いたシドロランであったが、昼食時であいにく満席、予約を入れなかった彼は店から追い返され、口にするのはやはり《またしても失敗だ》の一言<sup>15)</sup>。つくづく食に見放された男である。だが、彼は諦めず、同じ日の晩、今度は抜かりなく予約を入れて《成功した食事》にありつこうとする。注目すべきは、彼が用いた《ディコルニル Dicornil》なる偽名である。この章（オージュの第三の物語が始まる第9章）の冒頭で明かされることだが、シドロランは十八カ月の間、獄中で過ごした暗い過去があった。それ故、「身元を知られることを恐れていた」(F.B., p.111) 彼が偽名を用いることも、さほど不自然なことではない。しかし、この偽名は完全に身元を隠すというものではなく、密かに自己の同一性を保持している。というのも、これは《Cidroline》のアナグラムに他ならず、同一の構成要素の異なる配列に過ぎないのである。とするならば、同一にして異なる《ディコルニル》の名は、いったい何を意味しているのだろうか。シドロランは予約の際にこう述べている。

— [……] Dは公爵 duc のD, Iはジョアシャン Joachim のI, Cはカペ家の人 Capétien, Oはオネジフォル Onésiphore, Rはリファント Riphinte, Nは某氏 N<sup>16)</sup>, 残りはそれ相応に。(F.B., pp. 122-123)

言うまでもなく、これらはシドロランの夢の中に登場する人物たちである。つまり、《ディコルニル》なる偽名は、スペリングの入れ換えによりシ

ドロランの同一性を隠蔽かつ保持するだけではなく、分解されて単なるアルファベットとなった構成要素のひとつひとつが、互いが互いを夢に見る《他なる我<sup>ル・テル・エ・ゾ</sup>=分身》を指し示しているのである。このことは《某氏 N》についても言える。匿名の予約だと悟った給仕頭は「デュポン Dupont さんでよろしいですね」(F.B., p.123) と、極めてありきたりの名を挙げるが、これもまた深いところでオージュとつながっているのである。というのも、『青い花』の冒頭近くで明かされていたように、オージュの城があるのは「ラルシュ、橋の近く Larche, près du pont」(F.B., p.17) なる場所だからで、もし仮にこれが《森の近く près du bois》であったとすれば、給仕頭は当然《デュボワ Dubois》の名を挙げたことであろう。他方、《ラルシュ》について言えば、シドロランの住む平底舟が《箱舟 L'Arche》と呼ばれていることは先に見たとおりである<sup>17)</sup>。

単なる予約のために、こうも手の込んだ策を弄したのは何故か。それは同じ日の昼、このレストランが「彼を追い返した」(F.B., p.122) ことと無関係ではないだろう。注目したいのは、《追い返す=抑圧する refouler》という多分に精神分析的な用語である<sup>18)</sup>。抑圧の対象が主体にとって不快な心的表象であるとするならば、「簡素な食事を、ましてや食事が無いことを何よりも恐れている」(F.B., pp.104-105) オージュにとっては、シドロランの口癖《また失敗した》こそが、自らの分身において認め難い暗部であろう。つまり、シドロランが宿命的に有する非=オージュ的な部分が検閲にかけられ、それが故に抑圧、排除されたのであり、アナグラムと匿名性を巧みに組み合わせて《ディコルニル=デュポン》なる偽名を案出するシドロランは、検閲の目を欺くためには何でも利用する《夢の作業》を企てていると言えよう。しかも、シドロランは、一人だけの予約と聞いて不満げな受付に対し、「でも私は四人分=並外れて comme quatre 食べますよ」(F.B., p.122) と、相手の歡心を買おうと必死である。逆に言えば、《貪り食う》ことを確約することが、このレストランの客となるための条件で、実際、受付はこれを確認して初めて、相手の《名》を尋ねている。とするならば、このレスト

ランで供されるものは、このエピソードの裏側でオージュが貪り食っている銀の時代の食なのではなかろうか。

### III-5. 1614 年前半 (その5) : 《成功した食事》あるいは銀の食事の反復

実際、シドロランが食したものはオージュに負けず劣らず豪勢なもので、失敗した食に泣かされ続けてきた彼にしては、奇跡的とも言える美食の数々であった<sup>19)</sup>。

シドロランは、まったくもって大いに食べた。

レストランにはほとんど客がいなかったので、時折、給仕頭は、万事つつがなく運んでいるか、見にやって来た。クリビアックは評価も高く、フィナンシエール・ソースのヴォロヴァンは貪り食われた *dévoré*。(F.B., p.128)

繰り返すが、《貪り食う》ことはオージュにのみ許された特権で、シドロランは《ディコルニル=デュポン》として、本来は彼のものではない至福の時を、ここで、初めて（そしてただ一度だけ）味わったのである。示唆的であるのは、シドロランが《貪り食った》フィナンシエール・ソースのヴォロヴァンである。というのも、形容詞《財政上の、金融の *financier (ère)*》の意味するところは、第一義的に《個人ないし集団が意のとおり扱えるお金=銀 *argent* に関わる》ということで、数ある料理の中でこれが選ばれたことは偶然とは思われない。やはりこれは銀の食事であり、ここでシドロランはオージュの食を反復しているのである。だが、そうであるとすれば、シドロランはこの《成功した食事》を単純に楽しんでばかりもいられないだろう。オージュの窒息騒ぎに見たように、相変わらず貪り食うことを許す銀の食事は、過去の記憶と未来の予見のつきまとう危うい飽食であった。その意味で、食事中のシドロランの意識を支配した強烈な不安は、我々の読みにとって決定的である。支払いを終えて外に出た彼は、出くわした通行人にこ

う語っている。

— こんなことは長いことなかったのです。本当にまずかったり、いつもいつも何かうまくいかなかったりして。でも、あそこは完璧だった。食事が進むにつれて、私はひどい不安にとらわれました。こう思ったのです、こんなことはあり得ない。このまま続くはずがない。何かやり損なうことがあるだろう、と。(F.B., pp.130-131)

彼の胸を締め付ける《ひどい不安 angoisse》は、まさしく銀の時代の食に対する意識そのものである。満たされた食は永続しないこと、いま、ここで浴している幸福も、いつか、どこかで破局を迎えるであろうことを、シドロランは意識しながら貪り食っていた。とりあえずは美食の機会が与えられ、また実際に満たされる胃袋、だが、拭えない不安に苛まれる綱渡りの幸福<sup>20)</sup>、これこそがシドロランの味わった《成功した食事》に他ならない。彼の予見が外れたことは幸いだが、「うまく成功した un de réussi<sup>21)</sup>、彼の驚きは治まらない」(F.B., p.131) とあるように、銀の時代における日々の飽食は実は驚くべき奇跡であることを、このエピソードは物語っているのである。

こうして二人の主人公の二重性ないし反復性を完成させて、《ディコルニル＝デュボン》はその役目を終えた。偽名の仮面を脱いだシドロランは、もはやいつものシドロランである。《四人分の＝並外れた》食事のせいで激しい腹痛に見舞われた彼は、「あまりにも馬鹿げている。せつかく完璧だったのに」(F.B., p.140) と愚痴るしかない。銀の食がもたらしたこの余りに現実的な結末は、シドロラン本人がいかに無為徒食を志向してはいても、事実として彼が労働によって規定される《鉄の時代》の側に属する人間だからであろう。そして、この拭い去れない宿命こそが《成功した食事》のもうひとつの主題であり、奇跡的な美食を味わう一方で、シドロランは自ら銀を鉄に貶めるような振舞いを見せている。もう一度、シドロランの食事風景を見て

みよう。

### III-6. 1614 年前半 (その6) : 銀の食事に潜む鉄の形象

偽名の策略によって首尾よくレストランの客となったシドロランであるが、場を取り仕切る給仕頭は、それでもやはりこの客を試すが如く、『美食免許証』なるものの提示をシドロランに求めた。新たに制定された法律により、3000 カロリー以上の食事には社会保証の定めるこの免許が必要だといっているのである。これは実は給仕頭の単なる作り事で、当然シドロランは携帯していない。

— またしても失敗だ。

— いえいえ、お客さん、とんでもない！ と給仕頭は情け深くも叫んだ。あっさりと諦めては=斧より前に柄を投げては *jeter le manche avant la cognée* いけません。(F.B., p.125)

危ないところである。ディコルニル=シドロランがふと漏らした食の嘆き、これは銀の時代にあってはならない。しかも、相手は「人の顔を覚えるのが得意だ *physionomiste*」(F.B., pp.128, 130) と自負する給仕頭である。その慧眼からすれば、この客が同じ日の昼に《追い返した=抑圧した》男であることを見抜いて然るべきであろう。ところが、自慢の人相学は怪しいもので<sup>22)</sup>、また《四人分の=並外れた》注文の数々が功を奏したのか、シドロランを「総支配人=社長か何かに違いない」(F.B., p.124) と思い込んだ給仕頭は、この「弁別記号 *signes distinctifs* のない人物」(F.B., p.97) が発した、それこそ唯一と言ってよい弁別記号を見逃してしまった。これが決定的なミスであることは、こうして始まった会話の成行きを見れば明らかであろう。相手の言葉尻を捕らえて、正しい言い方は《斧より後に柄を投げる *jeter le manche après la cognée*》だと指摘したシドロランは、当惑ぎみの給仕頭にその謂れをこう説明している。

— 説明してあげましょう。昔々、一人の木こりがいて……、  
こう言ってシドロランは黙り、別のことを考えているようであった。  
[……<sup>23)</sup>

— お客さん、お客さん、と給仕頭が穏やかに言った、続きを待っているのですが。

— …… 彼の斧の鉄刃 fer を深い淵の底に落としてしまったのです。

— 深い淵の？

— 物語 histoire ではそんなふうに語られているのです、とシドロラン。彼は探しに行くことなど出来ませんでした。

— なるほど、と給仕頭が言った。深い淵ですからね……。(*F.B.*, pp.125, 127)

敷衍すれば、柄がまだ役立つのに《諦めて》投げ捨ててしまった、というのがシドロランの解釈で、対する給仕頭の見解は、柄だけあってもしょうがない、というものである。彼は「見つけるのが難しいのは、それは鉄刃 fer の方でした。馬鹿げていますよ、あなたの物語 histoire は」(*F.B.*, p.128)と断じている。両者の言い分には立ち入らないが、注目すべきは、ここに挿入された二つの《鉄 fer》である。先に見たように、《労働》の隠喩であるこの金属はテキスト全体で5度登場し、そのうちの三つは第一の物語に組み込まれ、さらにその中のふたつは《労働者 *travailleur*》という語を挟み込むかたちで提示されていた。この象徴性はここでは、ふたつの鉄のいずれにも《物語＝歴史》という語が寄り添い並ぶことによって、もう一度強調されている。労働の不在を定義とする神話的ないし前＝歴史的な時代に対して、まさしく労働の選択によって始まる鉄の時代こそが、本来の意味での《歴史》に他ならない。つまり、見逃された《また失敗した》が契機となり、本来的に鉄の時代に属するシドロランのみならず、話に乗せられた給仕頭までもが、このレストランにはあるまじき《労働＝歴史》の隠喩的形象を、まさ

しく銀の食事がなされている最中に導き入れてしまったのである。

さらにまた、ここで三度反復される《深い淵 abîme》もまた、二重の意味で示唆的である。第一に、シドロランの語り口（《昔々…… il y avait une fois》）が示しているように、この逸話の下敷きとなっているものは、広く知られたイソップの金、銀、鉄の斧の物語であろう。我々の文脈でその教訓を解釈すれば、金の斧を選んだ者は労働なき豊穡の中で滅び行き、銀の斧の選択も最終的な破滅を免れ得ない。鉄の斧を選び取り、自ら労働の不幸を担う者だけが、真に歴史的な存在として生き長らえるのである。図らずも給仕頭が言うように、見つけることが難しいもの、逆にいえば困難ではあるが見つけ出すべきものは、金でも銀でもなく、労働に不可欠な鉄の斧に他ならない。第二に、《abîme》は《奈落の底、破滅》をも意味するが、シドロランが口にした《深い淵=破滅》をきっかけとして、この語が連鎖的に反復されることも注目に値する。つまり、諺に《災いは災いを呼ぶ l'abîme appelle l'abîme》とあるように、シドロランの漏らした《また失敗した》の一言が鉄の形象を呼び込み、鉄の斧が《深い淵》を呼び、こうしてもはや逆転できないかのような勢いを得て反復される《破滅》の暗示の直後、テキストは急激に加速して、オージュの物語は劇的な展開を見せることになる。最後にこの点を少しだけ見ておこう。

### III-7. 1614 年前半(その7): 銀から鉄へ、そして反転、黄金への回帰に向けて

リュスールと結婚したオージュは、三部会に出席するために、若妻を城に残したまま三度首都パリへと向かった。その道中、アンリ4世の騎馬像を見たデモステーンが、オージュも彫像をもつ気はないか尋ねた。己の姿を彫像という記念建造物に刻ませることは、先に聖王ルイとの絡みで話題となったカレンダーに名を残すことと同様(F.B., p.27)、積極的な歴史への参与を意味しよう。とすれば、これまで歴史との関わり合いを避けてきたオージュが、「そんなことは一度も考えたことなどなかった」(F.B., p.132)と答える

のも当然であろう。だが、ここで愛馬にして腹心のデモステータスは、あたかもシドロランが《鉄＝労働》を語るのを見計らったかのように、そろそろ歴史に目を向けるべき時が来たことを、主人に告げているのではなからうか。

ステップは答えなかったし、ステータスも演説を続けなかった、案内人が立ち止まったからである。一同の目に進行中の工事が見えた。

— この思いつきに立腹する謂われなどまったくない [……]。本当に、わたしには何か欠けていると感じていたのだ。つまりはこの騎馬像だ。パリに戻ったら、すぐに彫刻家を探すことにしよう。(F.B., p.133)

黄金時代および銀の時代にあつてオージュに欠けていたものとは、《労働＝歴史》に他ならない。オージュのこの台詞は、これまではむしろ《慣性の原理 principe d'inertie》に与してきた彼が、いよいよ《外的な力 force extérieure》を発揮して、それこそ暴力的に歴史を突き動かすことを期待させるに足るものである。しかも、この引用にもあるように、《歴史》的記念建造物＝彫像が話題となっているこの場面において、『青い花』の冒頭に仕掛けられ、その後は黄金と銀のきらめく舞台の裏側へと追いやられていた《工事＝労働 travaux》が<sup>24)</sup>、2頁の間に3度反復して語られてもいる(F.B., pp.133, 134 (×2))。実に巧妙なテキスト構成と言う他なく、我々はシドロランの口にした《鉄》を契機として、いよいよ《労働》の時代が到来し、真の意味での《歴史》が始まることを予想せざるを得ない。

ところが、馬から降りてもっと近くから《工事＝労働》を見るよう勧める案内人に対して、オージュは「もう十分に見た」(F.B., p.134)とこれを拒絶し、一人、供達から離れ、「心地よく人目につかない場所を探し始める」(F.B., pp.134-135)。またしても歴史の否認である。のみならず、『青い花』は、次に来るべき鉄の時代を暗示する《工事＝労働》の直後に、ティモレオ・ティモレイなる錬金術師を登場させ、またしても《黄金》を、今度は4頁のうちに7度、反復するのである(F.B., pp.136 (×4), 137, 138,

139)。しかも、それはまさしく計算されたかのように<sup>25)</sup>、276頁からなる『青い花』のちょうど中間点でもある。銀の飽食から鉄=労働への加速度的な展開、そして予期せぬ黄金への反転、これは何を意味しているのだろうか。次回はこの点を探ろう。

## 註

### \* ) 使用テキスト

Raymond QUENEAU, *Les Fleurs bleues*, Gallimard, 《folio》, 1965. (なお引用に際しては略号 *F.B.* を用いる。)

Raymond QUENEAU, *Une Histoire modèle*, Gallimard, 《folio》, 1966. (なお引用に際しては略号 *H.M.* を用いる。)

- 1) 我々が最終的に目指すところは、『青い花』が最後に辿り着く地点がコジェーヴ=ヘーゲル的な歴史の終焉なのかどうかを探ることにある。また、この読みを《拘束的》と言うのは、同じくコジェーヴ=ヘーゲル的な言説を下敷きとし、『青い花』の解説書的な役割が与えられている『規範』のシナリオによって、多元決定的なテキストの読みの可能性を戦略的に制限しているからである。詳しくは拙論「レーモン・クノーの『青い花』における歴史=物語の終焉あるいは金、銀、鉄の形象(その1)」、『小樽商科大学人文研究』第105輯、2003年3月。
- 2) *F.B.*, pp.94, 96 (×2).
- 3) *F.B.*, pp.81 (×2), 82 (×2). (オージュの三つ子も p.24 ではこう呼ばれている)。また、男性名詞《triplé》にも《競馬の三連勝》の意味がある。
- 4) 《唐突に》と言うのは、オージュの第三の物語はシドロランの「彼女 [=アルベールに依頼した家政婦] はどんな顔をしているのだろうか」(*F.B.*, p.117) を受けるかたちで、突然始まるからである。ここでは論述の関係でオージュの物語を先に見るが、次の引用中の《それ》は、したがってオージュと結婚するリュスユールの顔ということになる。
- 5) 原文は《Malplaquet qui grimoise d'angace》。つまり、《顔をしかめる grimacer》と《ひどい不安 angoisse》との置き換え遊びで、言語の混乱に彼の動揺が反映されている。
- 6) 「これらの解決法はすべて、大地がどこも一様に好条件だと仮定すれば、危機の後も集団を銀の時代と呼ばれている擬似的な黄金時代にふたたび埋もれさせる。」(*H.M.*, p.47)
- 7) オージュの顎鬚だけではなく、近習ムスカイヨは「アンパワー=ニュ子爵の称号をもつ権利」(*F.B.*, p.118) を得、司祭オネジフォルは「サルセロポリスの名目司教 évêque in partibus」(*F.B.*, p.119) に昇格している。つまり、時代の移行とともに、登場人物の在り方そのものに変化が見られる。
- 8) *F.B.*, p.164.
- 9) 要するに、危機に見舞われた起源の地を離れ、より豊富な食糧を提供してくれる土地へと移り住み、労働なき豊稷を維持するというのが、銀の時代の解決法である。移住とそのヴァリエーションについては cf. *H.M.*, pp.46-47.
- 10) 確かに移住においては、「何人かの構成員は [……] 後方にそのまま残ること

もある」(H.M., p.46)とはいえ、その前提は少なからぬ人口の移動である(減った分だけ食物供給に余裕ができる)。ところが、オージュはこれにも反して、三つ子の娘に婿をとることにより、領内の人口をさらに増やそうとしているように思われる。

11) H.M., p.57.

12) ちなみに、この場面で供された食の内容を挙げれば、「猪のパテと他にいくつか朝用の砂糖菓子」(F.B., p.118), 「さらに別のお菓子, 子猪の衣揚げ, 鱈の肝入りスフレ, 脂肪の豚足」(F.B., p.120)。やはり朝食にしては豪勢と言わざるを得ないだろう。

13) 《ひとつの集団の正常な変遷の図表》は、危機に先行する銀の時代を「漠然とした不安の忘却 oubli du malaise と新たな冒険的で幸福な期間」(H.M., p.71)としている。

14) 銀の時代の人間は時の流れとともに滅び行く定めにあるとはいえ、カサンドラの予見がなければ、少なくとも原初の《気安さ》を失うことはなかったはずである。ある意味で、出来事としての食の危機よりも、カサンドラの予言による意識の変化こそが黄金時代を終焉に導いたと言えよう。

15) 先に我々は《たらふく食う》間抜けについて解釈を施したが、その手掛かりとなったのがこの直後の場面で、そこにおいてシドロランは三つ子の娘とその夫たちが同じレストランに入るのを目撃し、「彼らは私抜きで浮かれ騒いでいる」(F.B., p.112)と呟いたのである。

また、こうして帰宅したシドロランについて、テキストは食料の《ストック》を問題としているが、これについては、家政婦がやって来る場面でもとめて検討する。

16) フランス語では、《某氏》を《N\*》ないし《N\*\*》と表記する。

17) さらに、仏伊国境の《ラルシュ峠 col de Larche》は別名《アルジャンティエール峠 col de l'Argentière》という。

18) 『青い花』の主題のひとつが夢であること、実際に精神分析(家)への言及があること(F.B., pp.156-157), そしてクノーがフロイトの熱心な読者であったこと、以上を考え合わせれば、ここでこの語が用いられたことは偶然ではないだろう。実際、このエピソードは《一度でいいから、成功した食事をしたい》という願望充足の物語に他ならない。

19) 食前酒には高級なウイキョウの酒精(銘柄は《白い馬》), オードブルはウオッカとともに大粒の新鮮なキャビア(当日, 超音速旅客機で届けられたもの), メインの三皿は、サーモンのクルビアック, フィナンシエール・ソースのヴォロヴァン, 雉のペリゴール産トリュフ添えローストで、ワインはもちろんヴィンテージもの(シャブリ 1925年とシャトー・ダンサン 1955年)。仕上げに高級チーズ各種と12種類のリキュール入りスフレ(熱気球のように丸々と膨らんだもの), 食後酒はシャルトルーズ。(以上, F.B., pp.123, 124, 128, 130, 131.)

20) この危うさを反語的に強調するかのようには、シドロランの食事は、「平和に en paix, 「平穩に dans le calme, 「安全に dans la sécurité, 「まったき平安のうちに en toute quiétude」終わったと描かれている(F.B., p.130)。

21) これはシドロランの口癖《また失敗した encore un de foutu》の対義的な表現で、この成功した食事が彼とは対称的な《他者》の食であることを物語っている。もっともオージュならば《またしても成功した encore un de réussi》と

述べるところだろうが、いまや明らかなとおり、この《またしても》には《幸いにも》といったニュアンスが伴っている。

- 22) 彼はシドロランの娘たちが三つ子であることに気が付かなかった (F.B., p. 128)。
- 23) この省略した部分において、会話は一瞬だけ寸断されて、リュスユールの父親の木こりが話題となる（ただし、賭けの結果はここからは分からない）。これはもちろん二人の主人公の二重性を印象づけるためのものであろう。
- 24) 第一の物語においてオージュが首都パリへと向かったのは、ノートル・ダム の工事を見るためであった。また、同時に、シドロランの物語においても、ひとつの建物の工事が開始されていた。直接的に《工事=労働》が言及されたのは p.28 が最後であったから、この偏差は意図的なものであろう。
- 25) 「文学作品はひとつの構造、ひとつの形式をもたなければならない」という主張からして、大いにあり得る。(Raymond QUENEAU, *Entretiens avec Georges Charbonnier*, Gallimard, 《NRF》, 1973, p.47.)